

第1回

日本医師会

赤い心臓

かかりつけ医たちの奮闘
受賞者紹介



主催 日本医師会／産経新聞社

後援 厚生労働省／フジテレビジョン／BSフジ

特別協賛 ジャパンワクチン株式会社



目次

03 第1回「日本医師会 赤ひげ大賞」概要

04 主催者挨拶 日本医師会 会長 横倉義武

05 主催者挨拶 産経新聞社 代表取締役社長 熊坂隆光

06 協賛社挨拶 ジャパンワクチン株式会社 代表取締役社長 長野 明

07 受賞者一覧

08 第1回 表彰式

受賞者紹介

12 松田 好人 (北海道)

17 久藤 眞 (三重県)

22 横手 英義 (和歌山県)

27 鈴木 強 (広島県)

32 中野 俊彦 (大分県)

37 第2回「日本医師会 赤ひげ大賞」推薦概要

38 選考委員紹介

● 第1回「日本医師会 赤ひげ大賞」概要

「日本医師会 赤ひげ大賞」は、日本医師会と産経新聞社が主催となり「地域の医療現場で長年にわたり、健康を中心に地域住民の生活を支えている医師にスポットを当てて顕彰すること」を目的として、ジャパンワクチン株式会社の特別協賛のもと創設されました。各都道府県医師会から1名の候補者を推薦していただき、選考委員会の厳正な協議を経て、第1回「日本医師会 赤ひげ大賞」の受賞者5名が決定しました。

【主催】日本医師会、産経新聞社

【後援】厚生労働省、フジテレビジョン、BSフジ

【特別協賛】ジャパンワクチン株式会社

【推薦方法】各都道府県医師会が1名ずつ推薦

【推薦基準】

- ・地域の住民が安心して生活を送れるようなまちづくりに寄り添った活動を長年にわたり行っている医師
- ・過疎の医療現場、特に僻地や辺地、離島などで、住民を支えている医師
- ・障害をもった方や高齢者が安心して暮らせるような活動を行っている医師
- ・地域における学校保健活動、公衆衛生活動を通じ地域住民の健康管理を長年にわたり行っている医師
- ・原則として70歳未満の現役の医師

主催者挨拶



日本医師会 会長
横倉義武

今回第1回を迎える「日本医師会 赤ひげ大賞」は、今後、一層の高齢化の進展により、何でも相談できる「かかりつけ医」の存在がますます重要となっていくなかで、地域の住民の皆さんが健康で安心して生活できるよう、地域医療の現場で長年にわたり地域住民に寄り添い地道に尽力されている「現代の赤ひげ先生」にスポットを当て、その功労を顕彰することを目的として、日本医師会と産経新聞社の主催のもと、ジャパンワクチン株式会社の多大なるご協力をいただいて創設されたものです。

「赤ひげ大賞」命名の由来である「赤ひげ先生」は、やまもとしゅうごろう山本周五郎の時代小説「赤ひげしんりょうたん診療譚」を基に、くろさわあきら黒澤明監督が映画化したもので、実在のモデルは、江戸中期に貧民救済施設である小石川養生所こいしかわようじょうしよで活躍した小川笙船おがわしゅうせんですが、医療の本質は当時も今も変わりません。医師は、患者さんを前にした時、その方に寄り添い、同じ目線で治療に当たることが求められます。そのためには、私どもが行っている医療というものが、医療提供者である医師を始めとするさまざまな医療関係者の方と、医療をお受けになる患者さんとの信頼関係に基づいた協働作業でなければなりません。

今回、受賞された5名の先生方は、いずれも各地域において、献身的な医療活動を通じて患者さんの治療に携わっている方々で、まさに「現代の赤ひげ先生」としてご活躍されていらっしゃいます。

日本医師会は、「地域医療の再興」を第一に掲げ、地域の実情にあった、地域で必要とされる医療を適切に提供していく体制を構築し、今後も医療を通じて国民の皆様が安全で安心な生活を送れるよう「国民の生命と健康を守る専門家集団」として、さまざまな事業活動や国への働きかけを行って参る所存であります。

今後とも皆様方のお一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

受賞者の先生方、誠におめでとうございました。

主催者挨拶



産経新聞社 代表取締役社長
熊坂隆光

受賞者の皆様、ならびにご家族の皆様、誠におめでとうございました。

「日本医師会 赤ひげ大賞」は、日本医師会と産経新聞社が共同で、地域に密着して人々の健康を支えている医師の方々の功績を称えるとともに、広く国民の皆様に地域医療の大切さを改めてご理解いただくことを目的に創設しました。

受賞された皆様は、地域社会の中でなくてはならない存在として多くの信頼を集め、地域住民の健康を支えられています。医療の根幹を成す地域医療の充実こそ、高齢化が急速に進む日本にとって必要不可欠なものであるといえます。

産経新聞社は、今年6月に創刊80周年を迎えます。その記念事業として、日本経済の復興を目指し、再び強い日本を取り戻して世界における日本の存在感を高めるための提言型キャンペーン「目覚めよ日本力」を展開しています。世界を圧倒する日本の医療技術だけでなく、誰もが安心して暮らせる医療の充実こそが、世界各国から注目される「日本力」そのものなのです。

今回の第1回「日本医師会 赤ひげ大賞」の受賞者の皆様は、「現代の赤ひげ」といふべき地域に根ざした活動に従事されており、献身的な日々の活動は、まさに世界に誇るべき日本の力そのものです。

私ども産経新聞社は、報道機関として、日本の医療の充実、ひいては国民の健康増進の一助となるべく、これまで以上に邁進していく所存であります。

今後とも、皆様方の一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます、ご挨拶とさせていただきます。



ジャパンワクチン株式会社 代表取締役社長

長野 明

私どもジャパンワクチンは「力をあわせて、未来を守る」をコーポレートスローガンとしています。ワクチンで一人でも多くの日本の人々を感染症から守りたいという熱い想いで昨年7月に会社を設立いたしました。

「力をあわせて」という言葉の意味するところが、赤ひげ大賞となる医師の気持ちと共通するところがあると考えました。

地域医療の充実に長年取り組んでこられた医師の方々に光を当てることで苦労をわかちあい、その重要性を国民に幅広く知ってもらい地域医療の充実や理解を広めるきっかけになることを期待します。

この赤ひげ大賞に特別協賛させていただいたことを光榮に思っております。

今後とも、皆様方のお一層のご支援を賜り、本賞がますます発展していくことを心より祈念申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。



松田 好人

名寄市風連国民健康保険診療所 所長
(北海道)



久藤 眞

久藤内科 理事長
(三重県)



横手 英義

横手クリニック 院長
(和歌山県)



鈴木 強

鈴木クリニック 院長
(広島県)



中野 俊彦

直耕団吉野診療所 所長
(大分県)

第1回 表彰式



第1回「日本医師会 赤ひげ大賞」の表彰式は3月22日、皇太子さまご臨席のもと、東京・内幸町の帝国ホテルで開かれた。

皇太子さまは「受賞された方々は、地域にとってなくてはならない存在であると聞いています。長年の努力と取り組みの成果に心から敬意を表します」とお言葉を述べられた。

続いて、日本医師会の横倉義武会長、産経新聞社の熊坂隆光社長から5人の受賞者に表彰状や記念品が手渡され、受賞者代表として挨拶した中野俊彦医師は「患者が安心して生活できる医療を続けてきたことを評価していただき嬉しく思います」と喜びを語った。

表彰式後に開かれたレセプションでは、皇太子さまが受賞者一人一人とにこやかに歓談されたほか、特別協賛であるジャパンワクチンの長野明社長らがお祝いのスピーチを行うなど、会場は終始なごやかな雰囲気に包まれた。

● 第1回 表彰式



皇太子殿下 お言葉

長年にわたり地域医療の担い手として活躍されてきた医師の方々の功績をたたえて表彰する「日本医師会 赤ひげ大賞」の第1回表彰式に皆さんと共に出席できることをうれしく思います。

この赤ひげ大賞は、日本の医療制度の中で住民に最も近い存在として重要な役割を果たしている地域医療の現場において、各地域での様々な特徴のある取り組みが行われている現状に光を当てるとともに、地域医療の発展に貢献することを期待して、設立されたと伺っております。

日本の各地域の医療現場には、様々な特徴や課題があります。高齢化が急速に進んでいる地域、病院や診療所などが無くなり医師が全くいない地域、さらには都市部においても、様々な理由から地域医療を支える病院が撤退していくケースがあると聞いています。この度受賞された方々は、このような厳しい状況の下で、地域住民の生活に寄り添い、治療だけでなく地域住民の健康管理などに尽力されるなど、その地域にとってなくてはならない存在であると聞いています。

ここに、受賞される方々の長年の努力と取り組みの成果に対し心から敬意を表します。

近年、我が国は高齢化が急速に進み、国民の医療に対する期待がますます大きくなっています。特に地域医療の充実、住み慣れた地域で安心して暮らしたいと願う人々にとって必要不可欠なものと言えるでしょう。

今回「日本医師会 赤ひげ大賞」が設立されたことが、各地で人々の健康管理や診療を親身になって行っている医師の方々の大きな励みとなり、地域医療の更なる発展につながることを期待するとともに、この賞が末永く発展していくことを心から願い、私の挨拶といたします。



厚生労働大臣 祝辞

第1回「日本医師会 赤ひげ大賞」の表彰式に当たりまして、一言ご挨拶を申し上げます。

はじめに、本日栄えある表彰を受けられる五名の皆様に対し、心からお祝いを申し上げます。

本日受賞される皆様は、地域医療の現場において、住民が安心して生活をおくれるようなまちづくりに寄り添った活動を長年にわたって行われてきました。これまで、それぞれの地域で住民の健康が守られてきたのは、在宅医療や住民の健康管理など、まさに皆様の地道で継続的な活動があったからにほかなりません。改めて皆様の日頃のご努力に深く敬意を表します。

近年、急速な少子高齢化の進展などにより、我が国の医療を取り巻く環境

は大きく変化し、様々な課題に直面しています。

このような中、厚生労働省では、質の高い医療サービスが適切に受けられる体制を構築し、全ての国民が健康で、安心して生活を送ることができる社会となるよう、全力を挙げて取り組んでいるところですが、その実現のためには、皆様のような地域医療の第一線で活躍される、全国の「赤ひげ」の皆様のご協力が不可欠です。

皆様には、地域医療の発展のため、今後ともなお一層のご尽力をいただきますようお願い申し上げます。

今回、地域医療の現場で活躍される医師に光をあてるため、本事業を創設された日本医師会、産経新聞社をはじめとする関係者の皆様に敬意を表するとともに、「日本医師会 赤ひげ大賞」の一層の発展、本日お集まりの皆様のご健勝を祈念して、私の挨拶といたします。

厚生労働大臣 田村憲久
厚生労働事務次官 金子順一 代読



皇太子さまのご臨席のもと、多くの関係者が出席し盛会の表彰式



レセプションで受賞者と歓談される皇太子さま



横倉日本医師会会長、熊坂産経新聞社社長が、各受賞者を表彰



受賞者それぞれが、この賞を励みに、今後の地域での活躍を誓う



受賞者代表の中野俊彦医師は、地域医療が評価された喜びを語った



選考委員の山田邦子さんは、自身の治療体験を基に挨拶した

「呼ばれば自分が行ってあげたい」 行政の縦割りに挑む

松田好人

北海道



(三尾郁恵撮影)

まつだ・よしと 名寄市風連国民健康保険診療所所長。昭和43年、岐阜県生まれ。44歳。山形大医学部卒。北海道大医学部第1外科入局。同大付属病院などを経て平成17年から現職（当時は風連町）。学校医も務め、お年寄りから子供まで地域医療を支える。

「旭川より北には医師は来ませんから」。その旭川以北の勤務地に挑んだのは7年前だ。

「高校までは東京でしたが、最初に受かったのが山形大だったので。勤務地はもっと北がいいと思いました。スキーが好きですからね(笑い)」

1年の半が冬といわれる北海道にあって内陸地の風連はことさら厳寒の地として知られる。旭川から宗谷本線で北へ、1両編成のディーゼルカーに2時間弱揺られて風連駅に着く。2月に取材で訪れた際も、風連駅から広がる風景は一面、真っ白、道路の両端には除雪によってできた2メートルほどの巨大な壁面がずっと続いていた。

「きょうは暖かくてよかったですね。20度ありますから。昨日は25度でしたよ」。むろん氷点下での話だ。内地からの人では、スキーが好きだけではとても勤まる土地ではなく、相当な覚悟が秘められている。

診療所は市立であるため、医師も市の職員の立場にある。職務範囲は診療所での治療にある。それなのに松田医師は大雪で道路がふさがる中でも、自ら運転して、訪問診療をはじめ、特別養護老人ホーム、グループホームに出かけていく。24時間、365日いつでも対応する。

こんな先生初めて

悲壮感はまったくない。むしろ飄々としていて時折冗談を交えて、周囲を笑わせている。そ



自ら運転。カーナビはなく住宅地図が頼り

して患者や医療スタッフが異口同音に言うのは「こんな先生は見たこともない」というフレーズだ。

訪問診療に向かう車で助手席に座る看護科長の宮部偉貞子さんはこう言う。「自分で運転する先生はいままでいなかった。とても気さくな先生なんです」。

市の予算の関係からかカーナビが入っていない。宮部さんは「初めての家だと、私が地図を開いて先生に教えながら、あっちかしら、こっちかしらと患者さんの家を探す。冬は道路は雪に埋もれるので、目印がなく大変」と語る。それでも先生が運転することによって機動力がアップし、「患者さんの具合を引き継ぐなどのカンファレンスを車の中ですぐにできてしまう」とメリットも多い。

外来で診察を受けにきた80代の女性は「深夜に血圧が急上昇したとき、先生は、はだし同然で来てくれた。いま長生きできているのは先生のおかげです」。この女性も「こんな先生は風連では初めて」と感謝している。

超越した職務範囲

お役所的な縦割りにこだわらないのがモットー。市内の特養「清峰園」は常駐の医師はおらず、松田医師が嘱託医の立場で入所者の回診を行う。同園の看護係長、真鍋ゆみ子さんは「普通なら自分の診療所で手いっぱいのはず。入所者に異常があったら、松田先生なら365日、24時間いつでも来てもらえる。こんな先生は初めて」。

日頃の定期回診に加え、患者さんから呼ばれば、「自分が行ってあげないと」と体が動く。特養にも自ら運転して駆けつける。この取り組みは入所者の健康状態を維持することにつながった。数字でも明確に表れている。清峰園の入所者（100人定員）が他の医療機関に入院す

る日数が平成19年に延べ598日だったのが、23年には90日に激減。もう一つ関わる風連地区の特養「しらかばハイツ」でも外部での入院日数は同様に減っている。

このことは同時に、地域唯一の救急対応の名寄市立総合病院の負担を減らすことにも役立っている。「（急患対応は）総合病院の佐古和廣院長（今年3月で退任）に頼まれたんですよ。頼まれたら断れない性格なので」としつつ、「私が自分の仕事ではないと拒否したら、救急の先生たちが疲れちゃいますよ。こういう問題は、行政の方にはわかりづらいんですけどね」。

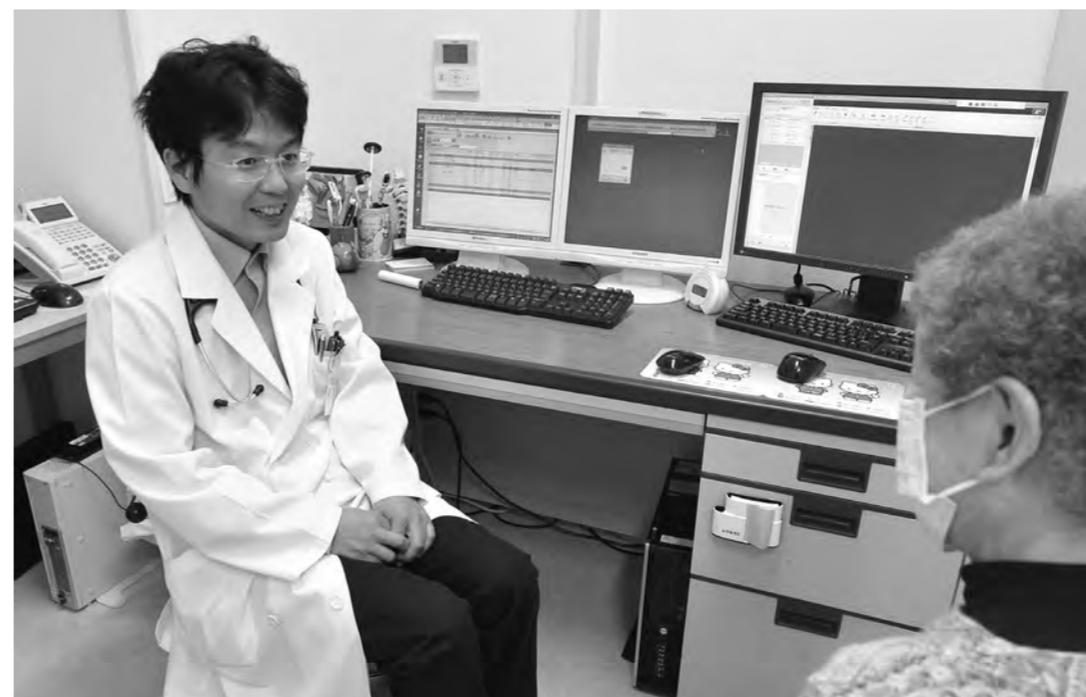
旭川と稚内のほぼ中間に位置する風連は人口4500人の地区。主な産業はもち米の生産だ。やわらかい食感が特徴で、全国的に有名なあんころもちの材料を供給している。



チームワークが評判の診療所スタッフ。昨年、松本晋一郎医師（手前右）が加わった



大雪でも笑顔で訪問診療



「先生、来たよ」が診察券代わりの診療所

30歳と広大な田んぼを有する農家への訪問診療に、取材で同行させてもらった。患者は83歳の女性。旭川医科大でがんの手術を受けて、「家に帰りたい」と言って戻ってきた。胆汁を体外に出すチューブもまだついていて痛々しい。自宅奥のベッドに横たわる女性に「きょうは元気？ どうか痛いところある？ ぼくの顔見て元気出してよ」と軽妙な言葉でリラックスさせる。同居する次男は言う。「風連のような小さな地区にも訪問診療があるのは知らなかった。術後のフォローで旭川や市内の病院に母を車に乗せていくのは大変だから、本当に助かる」。

地域のかげ橋に

女性は働き者で、ずっと、田んぼの仕事に精を出していたという。こうした農業の担い手の健康を管理することは、結果的に都会などの人たちに農産物を供給することにつながる。松田医師が実践する地域医療は、ひとりの患者への治療にとどまらず、ひいては全国へのかげ橋にもなっている。

少子高齢化や過疎化への対応が遅れ、そのおりで地域医療がしわ寄せを受け、病院閉鎖が相次いでいる。松田医師のいる風連はそうっていない。「それはね、だれかがやらないと地域の医療は崩れてしまうから」という思いに支えられているからだ。

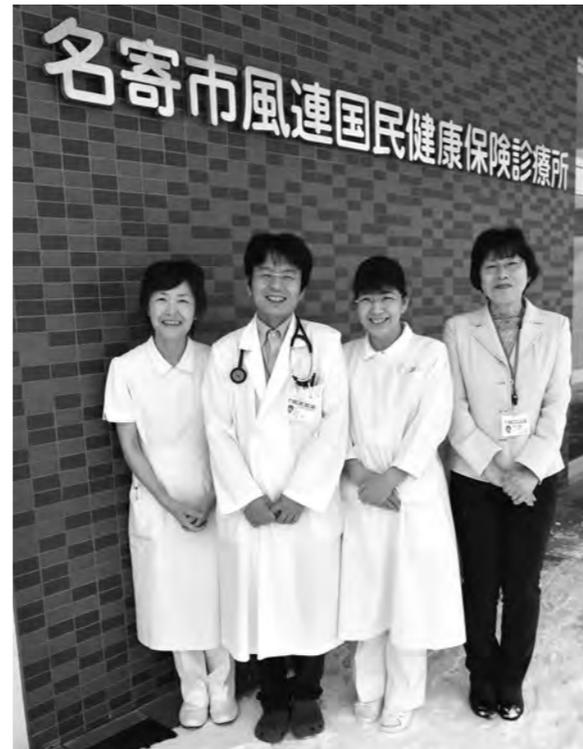
とはいえ、医師1人で24時間の呼び出しに対応することは、犠牲も伴う。元看護師の妻、潤子さんとの間に子供は長女(中3)、次女(小6)、長男(年長)の3人。パパと遊んでいたのに、急にいなくなったということも起きている。札幌まで遊びに行ったのに、「ごめん、ごめん、仕事で呼ばれたから帰る」ということも。

救われるのは患者たちの言葉だ。「お父さん

にお世話になっているんだよ」「お父さんにいろいろなことをしてもらっているの、ありがとう」と子供たちに話してくれているという。「子供はブーブー言うときもあるんですけど、患者さんからこのように聞いて、親の仕事を理解してくれますね」

4月で赴任してから8年目を迎えた。「腰掛けなのかな、と思われていた時期もあったようですが、家族もいるし、ここに家も建てていますしね」。

「先生、死ぬときは頼んだよ」と言われることがある。「それは医者冥利に尽きます。私も死ぬまでここにいます」。人生の先を見つめながら日々の診療に当たっている。(大家俊夫)



「女性には逆ええませんか」。女性スタッフとは笑いが絶えない

「患者や家族に安心感を」……親子2代で地域に根ざす

久藤 眞

三重県



(沢野貴信撮影)

くとう・まこと 久藤内科理事長。昭和21年、三重県生まれ。66歳。三重県立大医学部卒。同大医学部付属病院に勤務、この間、旧宮川村(現大台町)国民健康保険報徳病院、県立一志病院などに赴任。60年に久藤内科を開業。

三重県津市の沿岸部にある寺院。訪問診療に訪れた久藤内科院長の久藤真医師が「どやなー（どうですか）」と、併設された住居の引き戸を元気よく開けると、患者の尼僧、菅沼慧麟さん(87)は待ちわびた様子で迎えた。

「先生の声の聞いただけで病気が飛んでいく」菅沼さんが元気に話す様子を見つめながら、苦笑いの久藤医師は「ほめすぎや」と手際よく脈を取っていく。

菅沼さんは平成24年5月に脳梗塞で倒れた。救急車が呼ばれた際、頑として「久藤先生に診てもらおう」と聞かず、救急設備が整った大きな病院ではなく、久藤内科に運び込まれた。その後、自宅で定期的な訪問診療を受け、今では歩けるまでに回復した。「先生は患者の気を楽しませてくれるのがいい。病気は緊張したら治らん。本当に先生を頼りにしている」と信頼は絶大だ。

最後に足の腫れ具合を確認する久藤医師を横に見ながら、「お父さんの代から親切にしてもらっているけど、よく似てますねん。赤ひげ先生やな」と手を合わせた。

「患者は家族と同等」と白衣やスーツは着ず、季節を問わず裸足にサンダル履きが自分のスタイル。常に微笑みを絶やさず、ざっくばらんで温かな人柄がにじみ出ており、その姿は患者に安心感を与える。

医療だけでない「役割、を

久藤医師はライフワークとしての「血友病患者の治療」を行うとともに、津市で昭和初期に医院を開業した父、賀之雄さんの代から親子2代にわたり、地域に寄り添った医療活動が続いている。

メインとなる外来診療のほか、定期的に患者



「訪問することで安心感を与えたい」。診療以外の役割も重視している

宅を訪れる訪問診療を1日約10件こなし、さらに体調が急に悪くなった患者がいれば昼夜問わず往診にも駆けつける。内科から精神科まで専門に偏らず診察し、今では診たことのある患者の年齢層は0～105歳にまで広がった。「地域に根ざすことで患者も家族も信頼してくれる」。

子供の頃から賀之雄さんが自転車に乗って往診に向かう姿を見ていた。当時は医師が少なく、訪問診療や往診に行く回数は現在よりも多く、その忙しい様子は目に焼き付いていた。

昭和20年の津市空襲の折、疎開もせずに診察を続け、住民からの信頼が厚かった賀之雄さん。そうした父の影響もあり、久藤医師は自然と医学の道へ進んだ。

長らく勤めた大学病院では、専門の血液に関する研究に没頭。特に血友病治療に情熱を注ぎ、血友病友の会（患者会）のフィールド活動には

顧問として参加し、信頼関係を構築した。また後に、問題となった非加熱輸入血液製剤による血友病患者への肝炎などのウイルス感染防止にも尽力した。

だが、昭和58年に賀之雄さんが亡くなると「父の精神を少しでも受け継ぎたい」と考えるようになり、2年後に市内中心部に現在の医院を開業。

父の代からの患者、子供のころに世話になった人、幼なじみなどが多く受診に訪れたといい、「ありがたかった。（医院が）軌道に乗るのも早かった」と地域の人々のありがたみを感じた。昔を知る高齢の患者から「立派になったねえ」と涙ぐんで手を握られたこともあった。

「家で最期を迎えたいと望む患者、家族も少ない」と語る久藤医師だが、開業医は設備や

高度医療の面で総合病院より劣り、患者の病状が重ければ救急車を呼んだり総合病院への通院を勧めたりする。また当初に比べ若い人を中心に、往診依頼ではなく救急車を呼ぶ住民が多くなった。

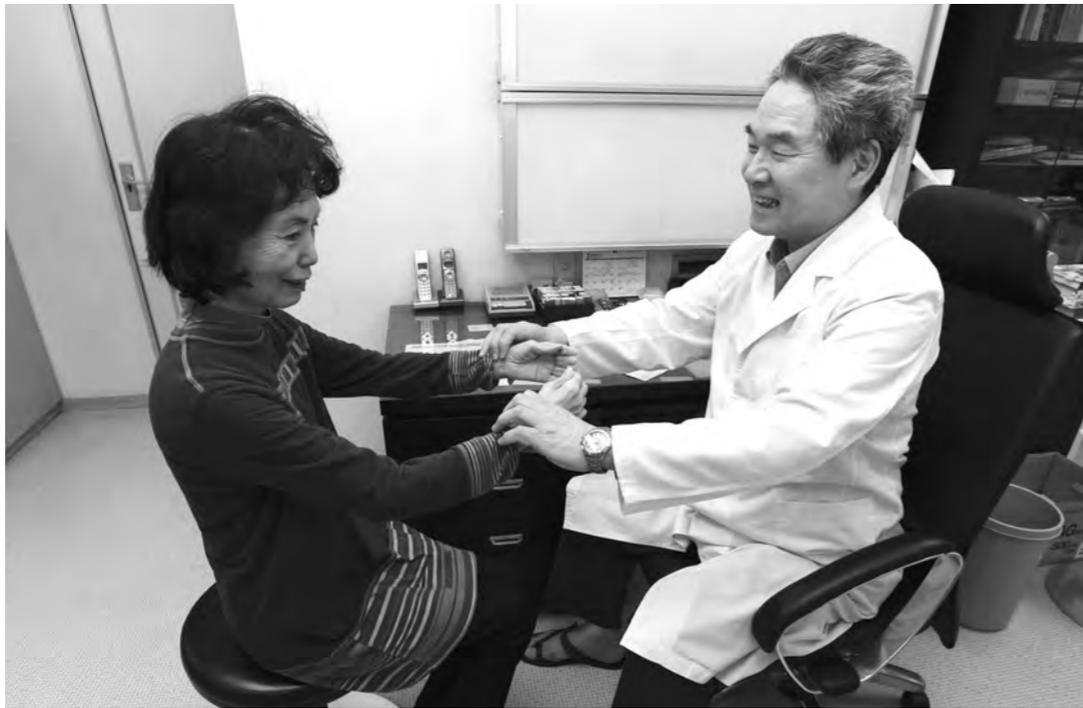
「救急車の方が早く患者の処置をできるし、社会情勢の変化だからそれでいい」。だが、その中でこそ、父のような「地元で根ざす医師」としての必要性を感じ、医療だけではなく「準家族としての役割、を果たしていく考えだ。

「安心を与える」視点で地域支え

久藤医師の姿勢は活動内容にも、よく表れている。患者には認知症や寝たきりの高齢者も多い。久藤医師は往診かばんの中に、常に地元の古



「久藤先生がいなくなったら大変。頼りにしている」と話す菅沼さん（左）。絶大な信頼を得ている



笑顔で語りかけ、患者の緊張感をほぐす。診察室では会話が絶えない



女性スタッフとレントゲン写真を確認。訪問診療だけでなく、日々膨大な業務をこなす

い地図や出身学校の校章、写真などを入れ、患者と昔話に花を咲かせる。そのほか、覚えた地元旧制学校の校歌や軍歌を一緒に歌ったりするという。

「話をすることで脳の刺激になるし、元気になる」。そう説明するが、自分にとっては生まれる前、または物心がつく前の話であり、仕事の合間に歴史の勉強をするのだから決して楽ではない。

また、患者から戦友ら旧知の友人の消息を尋ねられ、方々を当たって探してあげることもある。高齢者世帯では電球の付け替えまでもすることもある。

「何も特別なことはしていませんよ」。笑って謙遜するが在宅診療に情熱を傾けてきた結果、最期を病院ではなく久藤医師のもと自宅で迎えたという人、亡くなる前に大切な遺品を託してくる人もいう。

中でも先の大戦を生き延びた患者の男性からは死亡する1週間前、日露戦争中に使われていたのと同型の精巧な野砲の模型を託された。この模型を男性はとても大切にしていたという。医院の出入り口近くに飾ってあるこの模型は患者からの信頼の厚さを表す証しだ。

「定期的に訪問すること自体で、患者や家族に安心感を持ってもらえれば」

少子高齢化が進み、高齢者がいる世帯、高齢者のみの世帯は多い。その中で医師の立場から、医療にとどまらない「安心を与える」という視点から地域を支えていく心づもりだ。

今でも日々の仕事が深夜まで及ぶことは多い。二人三脚で歩んできた妻の京子さん（64）は「もうそろそろ、自身の健康管理も少しはやってほしい」と夫を心配する。

しかし、久藤医師を待っている患者は、まだまだたくさんいる。 (福田涼太郎)



往診かばんには常に地元の古い地図や写真も入っている

患者情報の共有化を実現

横手英義

和歌山県



(大塚聡彦撮影)

よこて・ひでよし 横手クリニック院長。昭和27年、和歌山県生まれ。60歳。和歌山県立医科大大学院修了。同大助手を経て平成2年に横手クリニック開院。伊都医師会長時代に「ゆめ病院」の立ち上げに深くかかわる。現在、和歌山県医師会理事。

秋になると、辺り一帯は赤橙色に染まるのだろう。

日本一の柿生産量を誇る和歌山県の中でも、良質な富有柿の産地として知られる九度山町。冬場はすっかり丸裸になった枝の間から、柿をイメージしてデザインしたという薄オレンジ色の建物が見えた。

「あれが横手さんのところ」

タクシー運転手が親しげにさん付けで呼ぶ「横手クリニック」は、高野山の麓にあるこの九度山町で20年以上、地域医療を支え続けている。

「これは病気や。けどあんたが家で寝てたら大変やで。お嫁さん、怒ってまうわ。首のリハビリ、せなあかんよ」

診察室からは、横手英義院長の厳しい声が飛ぶ。その様子を見ていた看護師長の岡田さゆりさん（55）が「院長はざっくばらんですから。それが患者さんに安心感を与えるんですよ」と笑った。

九度山のコンビニ

横手院長の専門は脳神経外科。和歌山県立医科大を卒業後、大学院に進んだ。研究を続けるつもりだったが、九度山町に住む両親から、地元のために開業するよう勧められた。「本心は大学病院に残りたかったけど、断れなかった。大きな借金をして、いきなり医院を作っちゃって大丈夫なのか、不安でしたよ」と明かす。

当時は珍しかったMRI（磁気共鳴画像装置）を導入したが、畑をぬうように続く医院までの細い道に、機械を載せたトラックが入れない。「放射線技師などの資格を持つ人も少ないし、柿の収穫期には『休ませて』と言われちゃう」とスタッフ集めにも苦労した。



「ひとりで取り組むのではなく協力することが大事」と語る横手院長

「子供を産む3日前まで働いていた」という内科医の妻、裕子さん（59）は、子供4人を育てながら、夫と医院を支え続けた。

「家に帰って、患者の処置をめぐって口論したこともあります。夫婦のどちらかは夜中まで医院にいるし、町を出ることはなかったですね」（裕子さん）。

夜中まで明かりがついている医院には、道に迷った人や、ティッシュなどの日用品がなくなった人が訪れることも。

「九度山のコンビニ、と呼ばれていました」

裕さんは苦笑するが、その呼び名、はあながち外れてはいない。クリニックには、コンビニのように24時間の医療ニーズに対応できる秘策があるからだ。

武器は「IT、

日本のあらゆる過疎地域がそうであるように、九度山町など1市3町からなる伊都医師会の医療圏にも、高齢化の波は押し寄せている。9万6千人の住民の27%（九度山町では34%）は65歳以上。一人暮らしの高齢者や老老介護も増え、在宅医療や介護のニーズは高まるばかりだ。中核病院の橋本市民病院と地元診療所の複数機関を受診する患者も多く、一人の医師でできることには限界がある。

そこで医師会が考えたのが、患者の血液検査やレントゲンなどの検査データ、投薬情報などを関係機関で共有できるシステム「ゆめ病院」だった。開発を進めた伊都医師会の小西紀彦元会長（75）は「情報を電子化して共有すれば、

検査や薬の重複が避けられる。災害で医療機関が被害を受けても、情報は残るから対応できる」とメリットを語る。ともに開発を進めた横手院長の実行力もあり、地元の病院や薬局、訪問看護ステーションなど49機関が参加する「ゆめ病院」は平成14年に開院した。

それから12年。ゆめ病院には現在、住民の75%以上の7万3千人の患者情報が登録され、在宅医療への応用も始まった。かかりつけ医が対応できないときは、当番医師が情報を基に患者を診る。情報はタブレット型端末「iPad」でも共有でき、患者の自宅地図を表示することもできる。地域医療にITを持ち込んだこのシステムが、24時間、年中無休の地域医療を支え、往診の強い味方になっている。



「人のために役に立つことができるから、いい仕事です」と語る



iPadを手に、往診をする。患者に明るく言葉をかけることも忘れない



「ぼくはすぐに患者を怒るんです」と言うが、診察室は笑いであふれている

病気でなく人を診る

午前の診察が終わり、往診の時間がやってきた。横手院長は、iPadでこれまでの診療をチェック。自宅の場所を確認し、看護師とともに医院を出発した。

最初に訪れたのは、脳梗塞で寝たきりの池下美代子さん（89）宅。聴診器を当て、血圧を測る。

「右と左で、ちょっと（血圧が）違うのよ。でも、このくらいなら心配ないよ。よかったね」

その言葉に、娘の福形多江子さん（65）の表情が緩む。

「横手先生は、病状だけでなく、食事や生活の仕方など全般の相談に乗ってくれる。明るくて、すばらしい先生です」

在宅医療に必要なのは、難しい医療の知識だけではないと横手院長は考える。

「医療と介護を切り離すのはおかしいでしょ。医療の中に介護がある。大学病院は病気を診る場所ですが、田舎のクリニックは人を診る場所。ほくはね、人を診てあげたいの」

強い思いを支える原動力となっているのは、横手院長が抱えるひとつの「後悔」だ。

「15年前に母が67歳で亡くなりました。全然、親孝行ができなくてね。もっと長生きしてほしい。でも、その分、いま地域のお年寄りを診ているのかもしれない」

九度山とは、女人禁制の高野山に入山できない母に会うため、弘法大師が月に9度も下山したことからつけられた地名という。「親孝行」の代名詞のような土地で、横手医師は両親の遺志を汲みながら、地元尽くす。

IT化で変わる時代に対応しながら、変わらない「孝行の心」こそ、赤ひげの原点と信じて。

（道丸摩耶）



人のために汗をかく仕事。一年中、半袖だ

（松永渉平撮影）

試練から逃げず、住民に寄り添う

鈴木 強

広島県



（志儀駒貴撮影）

すずき・つよし 鈴木クリニック院長。昭和20年、旧満州生まれ。68歳。広島大医学部卒。水島協同病院（岡山県）、秋田中通病院、広島共立病院などの勤務を経て、平成8年、鈴木クリニックを開業。診療科は内科、外科、胃腸科。

広島県福山市から、北へ約50^{キロ}。高齢化と過疎化が進む神石高原町の「旧神石町」地区に、鈴木強医師の「鈴木クリニック」はある。開業したのは、平成8年。広さ約104平方^{キロ}、人口約2300人のこの地区に、唯一、存在する医療機関だ。

「あてが外れちゃった。とにかく忙しい。田舎の医療には、のどかなイメージがあったから」。冗談めかして、鈴木医師は笑う。患者は朝7時半から詰めかけ、その数は、多いときで1日60人に上る。

看護師4人、事務職員2人の助けを借りながら、診察、レントゲン、胃カメラから縫合まで、あらゆる仕事をこなす。合間に、大きな病院への患者の紹介状や役所への提出書類を作り、訪問診療にも出かける。

体には、不整脈の一種「心房細動」の持病もある。疲れは半端でないはずだが、笑顔を絶やさないのは、「診療所のトップが不愉快な顔を見せては元も子もないから」。そこには、「患者さんに心地よく診療を受けてほしい」という「患者本位」の信念がある。

応援してくれた妻

医師を志したのは、産婦人科医だった父親の影響が大きい。ただ、子供のころから数学や物理が得意で、宇宙の話題も好きだった。昭和36年、旧ソ連のガガーリン飛行士による初の有人宇宙飛行を報じた新聞記事のスクラップは、今も宝物だ。広島大学医学部に入学後も、「卒業後は理学部に入り直し、勉強を続けようか」と考えていた。

実際には、勤務医として、ハードな現場にたたき込まれる。

最初に勤めた岡山県倉敷市の水島協同病院で



困難から逃げない「見敵必戦」の精神でやってきたと語る鈴木強医師

は、2年間、内科医をつとめる一方、「手術とか麻酔とかを教えてもらいながら、外科を手伝うようになった」。その後、秋田や広島の病院で外科医としてキャリアを積み、17年前、内科と外科、胃腸科を診る鈴木クリニックを開業した。

地域医療に身を投じた理由については、「都会で競争する野心がなく、『50歳になったら田舎に移りたい』と思っていたから」と控えめだ。神石高原町を選んだのは、「高校時代から近くの帝釈峡遺跡群に興味があったため」という。

妻、暁子さん（66）の応援も大きい。出会ったのは水島協同病院に勤めていたところで、暁さんは看護師だった。結婚後の言葉は、「あなたの行くところは、どこでもついていく」。開業後は、看護師の役目や経営の事務仕事を、進んでこなしてくれた。

「医師が僻地で開業しようとしても、だいたい、

奥さんが『行かん』ゆうて、だめになるんです。その点、妻は、何も言わず助けてくれた」。現在、暁さんは入院中だが、鈴木医師が、感謝の気持ちを忘れることはない。

患者の人生に向き合う

そんな鈴木医師を、2日にわたって追いかけた。1日目は、神石高原町立病院の手伝いでこなしている訪問診療への同行取材。2日目は、鈴木クリニックでの診療の現場だ。見えてきたのは、患者の病気だけでなく、人生に寄り添おうとする真摯な姿だった。

1日目、町立病院を車で出発し、山間のくねくね道やトンネルを走ること約20分、農業を営む有本武さん（80）宅にたどりついた。

築150年になるという旧家で、目の前に広がる田んぼには、イノシシよけの電線が張り巡らされている。鈴木医師は有本さんの体調に合わせて、1週間または4週間に1度、訪れる。

「よう来ていただきました」。イスに座りながら嬉しそうに鈴木医師を迎えた有本さんは、一昨年末、買い物中に脳梗塞で倒れ、今は自宅療養中だ。

「入院中にお会いしたときに比べれば、しっかりしとってじゃ」。有本さんにこうニコニコと話しかけながら、聴診器を胸や背中にあて、不自由な手足がどれくらい動くか、手を添えて確かめていく。

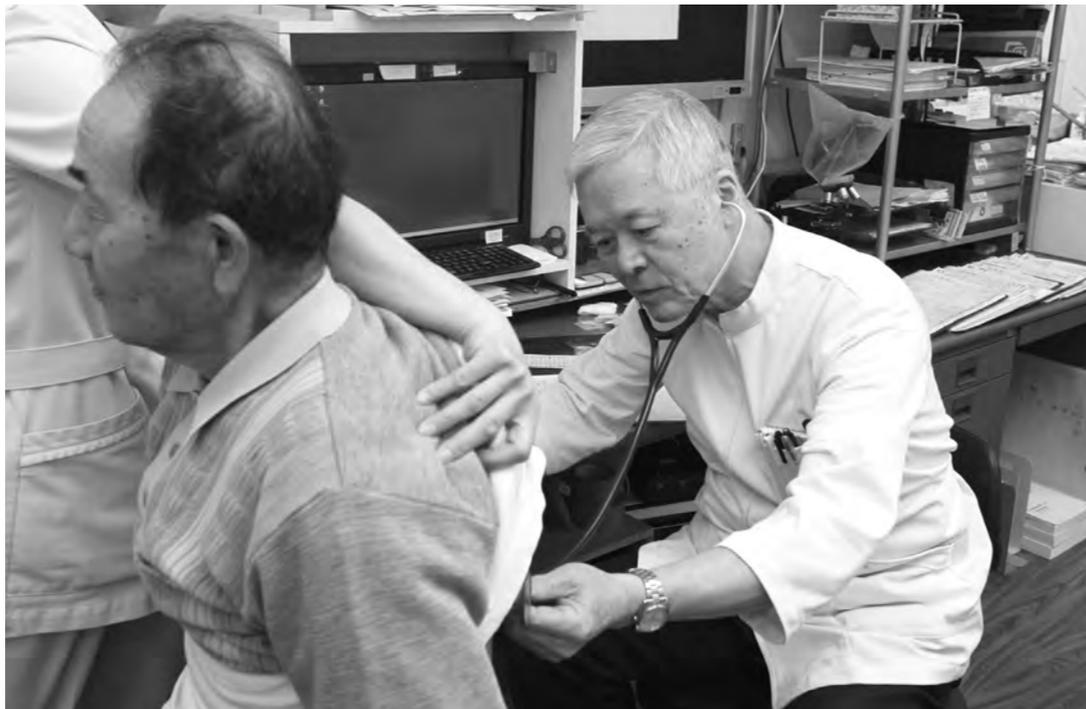
妻の久枝さん（77）への気遣いも忘れない。「奥さんの協力が大きいから、ここまで元気になるれたんよ」。時に自分の血圧を測ってみせ



訪問診療に向いた有本武さん（左）宅。なごやかなムードが漂う



鈴木クリニックの待合室では会話が弾み、活気があふれる



診察に心をこめる鈴木医師。患者は多いときで1日60人以上に上る

るなどして、笑いを誘う。「いい先生に巡り合えたと思えます」。有本さんは、感謝の気持ちを隠さない。

鈴木医師の訪問診療は、多いときで1日3件ほどだ。冬はとくに大変で、40cm以上の積雪の中を出かける苦労もさることながら、患者宅は古い民家が多く、構造上、エアコンでは屋内が暖まらないため、患者が厳寒にさらされている。「胸をはだけてもらって風邪をひかれたら、目も当てられん。寒い中では、確実な医療は難しい」

啓発に心を砕く

取材の2日目は、朝からクリニックを訪れた。やはり患者が詰めかけ、鈴木医師は昼過ぎまでに、40人の診療や検査をこなした。

2部屋ある待合室に患者を呼びに来る看護師たちは常に小走りで、自分がどんな作業をしているか、大声で互いに確認しあう。待合室の1つには、10人くらいで囲める大きなテーブルがあり、患者が世間話に興じている。通常の診療所と違い、明るさと活気があふれていた。

月1回、診察を受けにくる76歳の藤井年江さんに聞くと、「よくぞ開業してくださった。家族が病気したときは親身に相談に乗ってくださり、目尻が切れるほど涙が出た」。102歳になる中村茂さんは、「優しいだけでなく、厳しさもある。野菜作りに夢中になりすぎ、『休まないかんよ』と注意されるんです」と笑う。

もともと住民は医者にかかる習慣に乏しく、開業当初は戸惑ったという。診察時には進行がんで、手遅れのケースもあった。その後、農作業のときに水分を準備する大切さを説いたり、転倒防止の体操教室を開いたりして、啓発に心を砕いてきた。

これまで、困難から逃げず、「見敵必戦（＝出会う敵とは必ず戦う）」の精神でやってきたという。今後も、「体が続く限り、やる」と、住民に寄り添う覚悟だ。（山口暢彦）



ガガーリン飛行士による初の有人宇宙飛行の記事のスクラップは今も大切にしている

家庭を診療所の延長に

中野俊彦

大分県



(大橋純人撮影)

なかの・としひこ 直耕団吉野診療所所長。昭和18年、兵庫県生まれ。70歳。京大医学部を卒業後、京都南病院や厚生連日原共存病院、国立中津病院などの勤務を経て、平成元年に天心堂へつぎ病院の分院として開設された同診療所に赴任。10年に権利を譲り受け独立開業。

「病気は薬だけで治すのではない。患者の心が燃えるような、その人の関心があることをいかに見つけ出せるかです」

大分市郊外にある直耕団吉野診療所所長の中野俊彦医師は、徹底して患者や住民に寄り添う「かかりつけ医」であり、家庭医である。

いくつかの病院勤務を経て、山あいにあるこの無医地区に家族と赴任したのは平成元年。40歳代半ばだった。

兵庫県で生まれ、愛知県で育った。縁のなかった大分県で働くことになったのは、知り合いの医師から誘われたため。診療所隣に自宅を構え、四半世紀にわたり「365日、24時間対応」態勢で患者に寄り添ってきた。

地域医療への思いは若い頃から強かった。「住み慣れた土地で最期まで明るく生きたいとの住民の願いをかなえてあげたい」との思いだ。

患者の顔が診察券

中野医師が目指すのは、患者や住民の参加型医療の実現だ。その診療スタイルはユニークで中野医師の個性と考え方が実によく表れている。

吉野診療所には、診察券という発想がない。玄関が開けば、直ちにカルテが受付に用意される。職員全員が患者の顔と名前を覚えているのだ。

患者たちが「来るだけで体調がよくなる」と口にする“魔法の空間”でもある。

畳敷きの待合室には大きな掘りこたつが置かれ、診療を終えた患者たちがお茶を飲んだり、紙細工を楽しんだりする。時には中野医師や職員も加わる。医療機関であることを忘れそうだ。

患者と絵手紙での文通をすることによって磨かれたという中野医師の絵画の腕前は玄人はだし。「どうやって患者と楽しく遊ぶかを考えて



「住み慣れた土地で最期まで生きたいとの願いをかなえてあげたい」と語る中野医師

います。患者の日常の仕草を見れば健康状態がよく分かりますから」。中野医師にとって、すべてが診療の延長線上にある。

カルテの書き方も独特だ。病状や診察内容はもちろん、自らが撮影した患者の日常生活の写真が貼り付けられ、まるで患者との交流日記といった趣なのである。

性格や趣味、若い頃にしていた仕事、家族関係など、患者一人一人が置かれている生活環境を次々頭に入れていく。

「この時のトマトは上手にできたね」。「この前、飛んできたこの鳥の名前を調べたよ」。往診先で、カルテの写真を見ながらの思い出話に花が咲く。

もちろん、はじめから患者の協力が得られたわけではない。「『身元調査をするのか』なんて言われたこともありましたが」。今となっては懐

かしい思い出だ。

コンピューター画面ばかりに顔を向け、患者の顔さえ見ないで診断する最近の医師の診察風景に違和感を覚える。「とにかく患者とおしゃべりをする。患者の身体に直接触れて、五感を働かせて診察しています」

地区全体が診療所

中野医師にとっては、地区全体が診療所でもある。「このあたりのほとんどの家に行きました」。呼ばれば夜中であっても往診に出向く。気になる患者を見かければ、往診車を道路脇に止めて、「調子はどうですか」と声をかける。

診療所に入院ベッドの設置を望む声があっても断り続けてきた。「高齢者が病気になると、

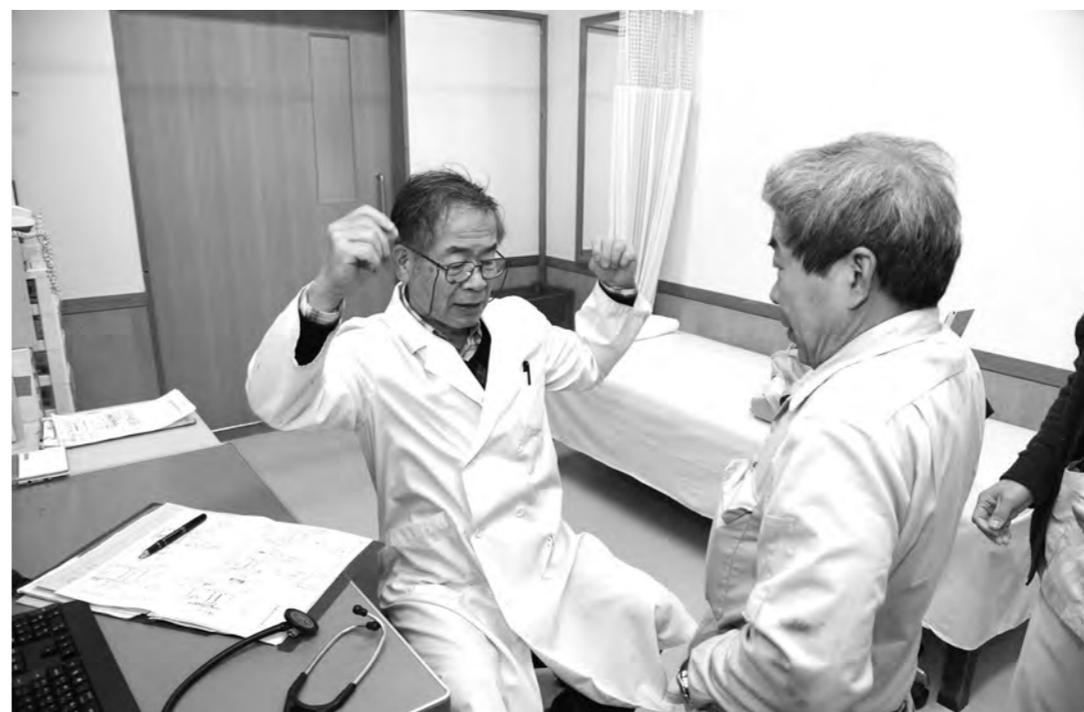
家族はすぐ施設入所を考えるが、支えさえあれば自宅で暮らせる。患者にとっては自宅が一番だ」と考えているため。

往診車の窓ガラスには、「診療所を家庭の延長に 家庭を診療所の延長に」と書かれてある。「うちの診療所のベッドが各家庭にあると思ってもらえばいい」。地域全体で医療を支えてもらおうとの発想だ。

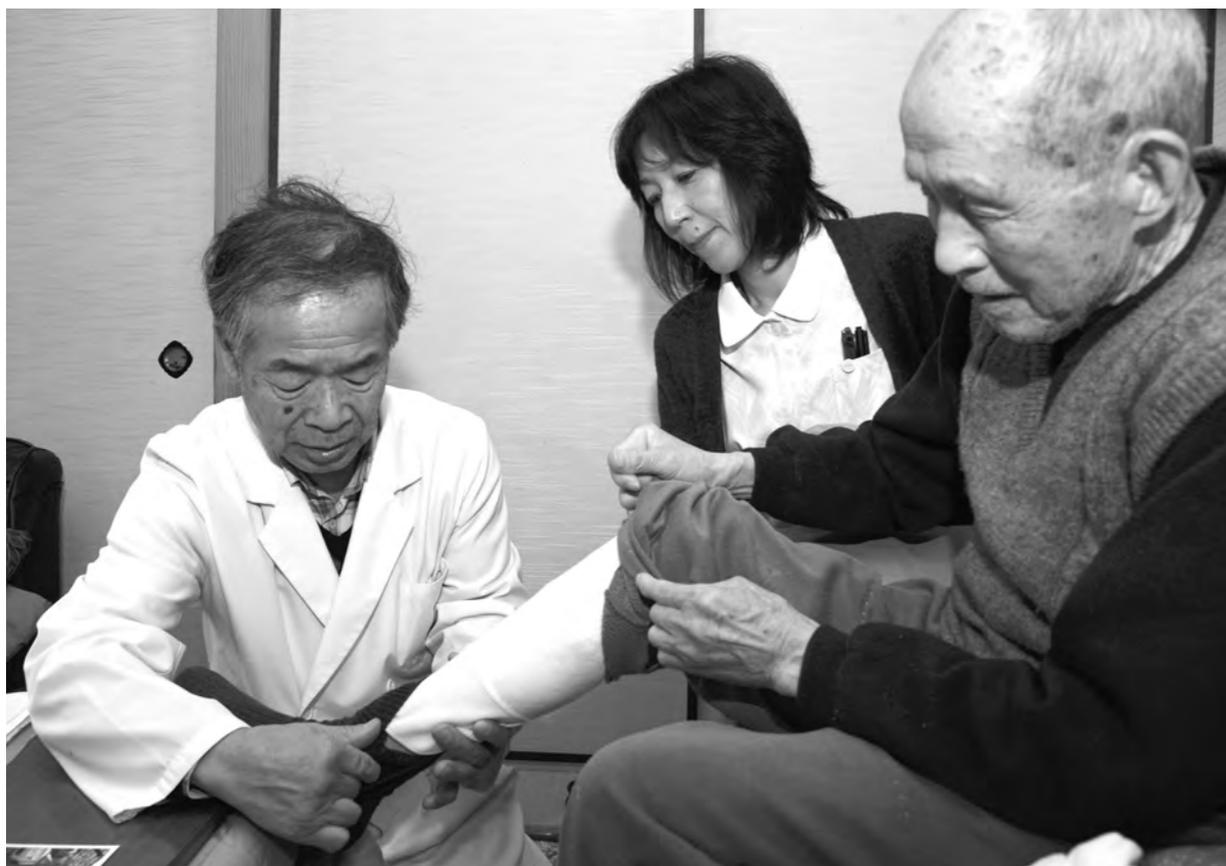
一方で家族の支える力が衰えたことも痛感している。いかに病気予防や病人介助のノウハウを分かりやすく説明できるか模索も続く。

「地域おこしのお手伝いをする」というのも大きな方針だ。「どんな薬を出しても、暮らしの基盤である農業が衰えたのでは元気になりようがない」との思いが強い。

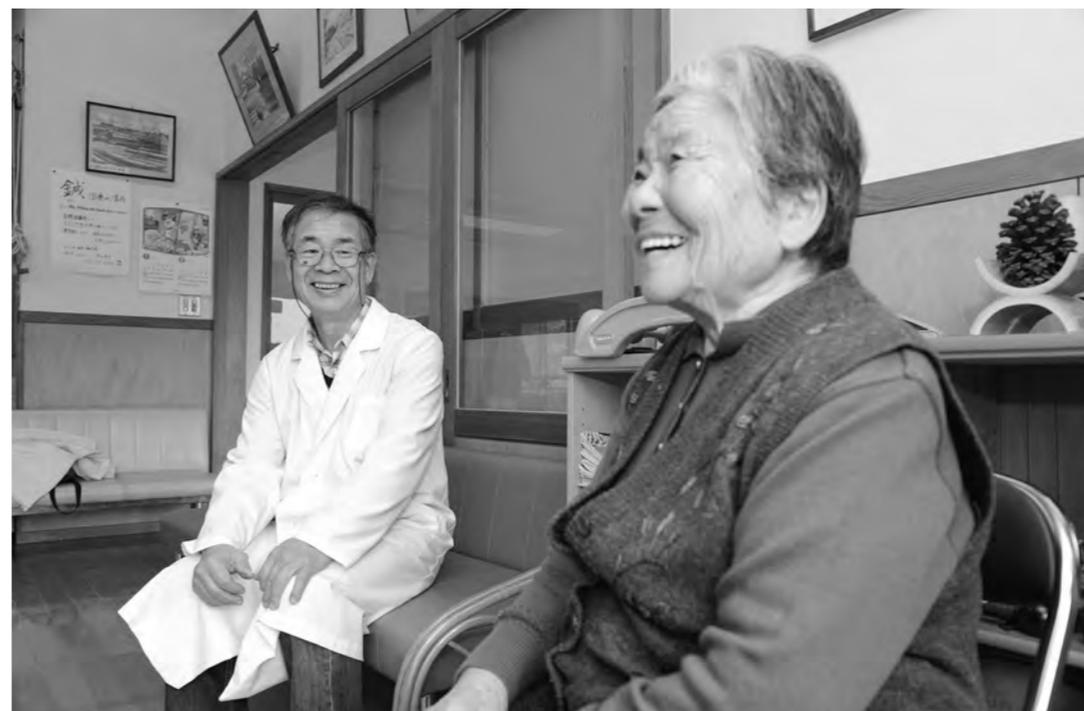
診察がない時には、地域の人々と農業に精を



徹底して患者から話を引き出すのが中野流の診察方法だ



呼ばれば夜中でも往診に出向く。高齢者にとってなくてはならない存在だ



「患者といかに楽しく遊ぶか」。待合室では世間話に花が咲く

出す。この時ばかりは、野菜作り名人である患者たちが「先生役」に早変わりする。

とはいえ、中野医師の探求心は農業でもいかに発揮される。専門誌で知った合鴨農法を農家に呼びかけ、生産者と購入者の橋渡し役も行った。冬の「合鴨捌き」はいまや診療所の風物詩である。

地域おこしをリード

ホタルが飛翔する川を取り戻す活動にも取り組んだ。「育てる会」をつくり、毎年3万匹を放流するなど大分市の名物行事にまで育てあげた。

「よそ者だからこそ、思いつくことがあるはずです」。いまは地区内の由緒ある神社の活性化に知恵を絞っている。

「地域に溶け込むのに苦労を感じたことはない」と言い切る。「こんな楽しい仕事をさせてもらって、ありがたい限りです」と語る表情は生き生きしている。

そんな中野医師を見つめる孝子夫人や診療所スタッフの眼差しは優しい。「先生は何でも上手で、いつまでも少年のような人です」

中野医師の悩みは、学会や勉強会に出かける時間がとりづらいことだ。「医療はどんどん進歩するが、医師が私一人なので、長い時間は空けられない」と話す。

「地域医療を目指す若い医師はたくさんいる。医学部を卒業して数年は国が責任をもって配属し、待遇面も含め若い医師が勉強できる環境を整える必要があります」

無医地区に来て一人頑張ってきた中野医師は、地域医療の行く末を、遠く見つめている。

(河合雅司)



写真の腕前も玄人はだし。患者の日常の一コマをカルテに貼って診察に役立てている

日本医師会

赤ひげ大賞

【主催】 日本医師会、産経新聞社

【後援】 厚生労働省、フジテレビジョン、BSフジ（一部申請中）

【対象者】 日本医師会会員および都道府県医師会会員で現役の医師。但し、現職の都道府県医師会役員は除く。原則として、70歳未満の方を優先

【推薦方法】 各都道府県医師会会長が1名を推薦

【推薦基準】 ・過疎の医療現場、特に僻地や辺地、離島などで、住民を支えている医師

・障害をもった方や高齢者が安心して暮らせるような活動を行っている医師

・地域における学校保健活動、公衆衛生活動を通じ、特段に地域住民の健康管理を推進している医師

・医療環境整備や社会活動を通じてまちづくりへ貢献している医師

【受賞発表】 産経新聞紙上

【選考】 日本医師会と産経新聞社の主催者側委員に第三者を交えた選考委員会において選定

【副賞と賞金】 賞状、記念盾および副賞100万円

● 選考委員紹介



羽毛田信吾

(昭和館館長、宮内庁参与)



向井千秋

(宇宙航空研究開発機構〈JAXA〉
宇宙飛行士、医師・医学博士)



山田邦子

(タレント)



外山衆司

(産経新聞社専務取締役)



河合雅司

(産経新聞社論説委員)



羽生田たかし

(日本医師会副会長)



今村 聡

(日本医師会副会長)



三上裕司

(日本医師会常任理事)



石川広己

(日本医師会常任理事)

日本医師会



かかりつけ医たちの奮闘
受賞者紹介

2013年5月発行

経過報告

日本医師会常任理事 石川広己

第1回「日本医師会 赤ひげ大賞」は、昨年9月11日に日本医師会より都道府県医師会宛て推薦依頼文書をお送りし、11月12日にすべての都道府県医師会より回答をいただきました。

その結果、47都道府県医師会のうち、20の医師会から候補者のご推薦をいただきました。

選考委員会は、12月20日、日本医師会館において行いました。選考委員には羽毛田信吾昭和館館長／宮内庁参与、向井千秋宇宙航空研究開発機構宇宙医学生物学研究室長、タレントの山田邦子氏、外山衆司産経新聞社専務取締役、河合雅司産経新聞社論説委員、並びに羽生田たかし日本医師会副会長、今村聡日本医師会副会長、三上裕司日本医師会常任理事、それに私が加わり、9名で厳正なる選考をさせていただきました。

その結果、5名の大賞受賞者が決定し、3月19日に公表され、3月22日の表彰式を迎えることになりました。

受賞されました皆様に心よりお祝いを申し上げるとともに、ご推薦いただきました都道府県医師会、更には、特別協賛いただきましたジャパンワクチン株式会社、ご後援いただいた厚生労働省など、本賞にご支援賜りました多数の方々に感謝を申し上げまして、経過の報告とさせていただきます。

ジャパンワクチン株式会社